

目次

巻頭言	30歳代の石田浩氏	川井 悟
各地域部会研究会の報告		
これから開かれる研究会		
組織状況		
編集後記		

【巻頭言】 30歳代の石田浩氏
 関西部会理事 川井 悟（プール学院大学）
 友人、石田浩氏が突然亡くなって3ヶ月になる。1月15日の台湾での葬儀、3月18日の関西大学でのお別れ会と、お定まりの儀式が着々と進んでいるのであるが、最期に立ち会わなかった私にはまだ実感が無い。ある朝目覚めたら、そこは中国のホテルで、ツインベッドルームの脇のベッドのそばに立って身支度をしながら、石田氏があの元気のよい声で、「やあ、起きられましたか？（彼は時折、バカ丁寧なしゃべり方をする。）川井君！今日は××村へ行くぞ！」と言うのではないかという気がしている。お別れ会の後も、お別れの当事者なのにヒョイと現れて、「川井君！葬式でこんなもんや！君は台湾の葬式に来んかったやろ。冷たい奴ちゃ！せっかく台湾式の葬式を見せやろうと思っただのに！」と、ドッキリカメラの種明かしをするのではないかと、私はどこかで期待していた。しかし、いまだに私の前に現れない。このあたりで、思いを書いてもよいのかもしれない。

つきあいが長いから石田氏についてはいろいろなことを思い出す。その60年弱の人生で、多くの人と出会い、いつも元気でエネルギーな活動をしている彼を見てきた。華々しく見える活動の陰の傷心や繊細さも含めて、人はいろいろな彼の側面を語れるだろうが、ここでは私が関わったことのうちで、彼が中国研究を本格的に始めた頃のことを述べることにしよう。

石田氏と初めて会ったのは1975年の春だったと思う。京都大学文学部で行なわれていた狭間直樹先生の「中国現代史演習」に彼が参加した時である。当時の彼は、学生運動や地域住民闘争といった活動実践から、中国研究を本気で始めようという方向転換しようとしていた時期だったと思う。彼は自分の著作の中で、研究の経緯を詳しく記しているから、興味のある方は彼の『台湾漢人村落の社会経済構造』（関西大学出版部、1985年）や『中国農村社会経済構造の研究』（晃洋書房、1986年）、『中国伝統農村の变革と工業化』（晃洋書房、1996年）を見てもらうと良い。このころの彼は、中国語の資料を読む力や中国農村の実際の事情についての知識よりも、中国農村の階級性と共同体性の両面性を、水利問題を通じて解明したいという問題意識が先走っていた。

その彼を、当時発足したばかりの「京都大学中国経済研究会」に誘った。以後、こうした研究会や学会での発表と討論、そのための準備が彼の研究活動の中心となっていた。

石田氏は、1年に2回の学会発表と2本の論文投稿を自らに課していた。研究会等での発表はそのための練習台、たたき台だった。「好きなことで飯が食えるのなら幸せ」とよく言っていた。週に数日の塾のアルバイト、春と秋の淀競馬場での集中的なアルバイトをこなし、生活のことどもに時間をとられつつも、残った時間と精力のほとんどすべてを中国農村研究に注いでいた。研究会での発表を前にして、彼が農学部農林経済の大学院生研究室で、あるいはアルバイト先の淀競馬場の監視員控え室で、まるで「主（ぬし）」のようにドッ

カと座り、「中国農村慣行調査報告書」や満鉄の「農村実態調査資料」を使って原稿を書いていた姿を今でもありありと思い出す。彼の研究は、日中戦争前あるいは戦争中に日本人が調査しまとめたり文献資料の分析が中心であったが、また同時に、台湾の漢人村落での聞き取りや文献研究も行ない、この両者の総合の中から「生活共同体」論がまとめられていった。彼の「生活共同体」論とは、外的環境条件の厳しい中国では、農村に住む家族や人々は決して単独では生き残れず、必然的に、血縁や地縁を通じて他の家族たちと関係を結び、こうした「生活共同体」が生活と生産、経済発展のいろいろな局面に大きく影響する、というものである。これは先に述べた問題意識にもとづく彼の研究の一つの結論であった。そして当時、研究者たちの中で議論にもなった。しかし私は、それは、1960-70年代にない日本で力を持っていたマルクスの経済社会論に共同体論の視角を持ち込むという当時の流行の社会観のごく素朴な表現に過ぎなかったのだと思っている。すべての概念は、何らかの意味で、有意義でなければならぬ。しかし、彼の「生活共同体」は、存在したものに命名しただけで、その存在の性質を明らかにするのにも、その構造を分析するのにも役立たない。せいぜい命名者、すなわち石田氏の、研究の視角あるいは姿勢を示しているに過ぎない。

1981年に関西大学に職を得てようやく「幸せ」を実現できることになった彼は、もはや「生活共同体論」を理論的に深めようとも、それをを用いて中国農村を分析しようともしなかった（いくつか例外はあるが）。現実の中国からおびただしい文献や情報が入ってくるようになったし、なにより実際に中国農村を調査する可能性が開かれたことが彼を別の方角に駆り立てていった。彼は文献資料を大量に集めつつ、実際の農村の事情を調査し、理解し、それを日本人に伝えることを研究の中心にしていったように見える。

石田氏の中国農村調査は、そのいくつかに私も同行させてもらったが、次のように総括できる。「文献研究を通じて理念的に中国農村を知っていた若者が、日本の農村調査の経験を出発点としながら、中国政府が外国人の調査を許す隙間を利用して、乏しい予算を最大限有効に使いつつ、実際の中国農村の歴史と現状を具体的に認識する過程の一例」と。ここには、彼の身近で同じ過程を体験した者として、私自身の自己批判も込めている。この規定は、彼の中国農村調査と研究のいろいろな面について、その特質を私なりに述べているのであるが、それについて説明するにはもう紙幅も尽きた。別の機会に譲りたいと思う。ただ、「生活共同体」という視角や、1949年前後の農村の連続性という観点は、その後の彼の中国農村研究をずっと貫いていると思われることを付言しておく。

石田氏の人生と研究についての、以上のような私の言い方に対して、彼は反論したいだろう。昔、私の批判に対して、彼は必ず反論したものである。そして最後には必ずこう言ったものだ。「川井君。人のことを言っているが、自分はどうなんや？」ここでの「生活共同体論」や彼の農村調査についての私の言い方は、今まで彼に言ったどの言い方よりもきついものである。それは心のどこかで、彼が再び現れて反論してくれることを願っているからかもしれない。

(2006年4月18日、記す)

〔各地域部会研究会の報告〕

西日本部会2006年度春季研究集会

日時：4月22日(土) 13:20-17:30

場所：福岡市中央区六本松福岡大学セミナーハウス・セミナー室D

第1報告(文学)

報告者 松岡純子(長崎県立大学)

報告論題：「「鄭成功」—日中現代文学の視点から—

コメント 岩佐昌暲（熊本学園大学）

第2報告（経済）

報告者 甘長青（九州大学）

報告論題：「分税制と圧力型体制—二重束縛下の中国農村財政—

コメント 真殿仁美（九州看護福祉大学）

第3報告（政治）

報告者 横澤泰夫（熊本学園大学）

報告論題：「中共党内民主派についての初歩的考察」

コメント 小竹一彰（久留米大学）

西日本部会総会

現況報告：岩佐昌暲（熊本学園大学）

関東部会2006年度春期修士論文報告会

日時：5月13日（土） 10：10—17：00

場所：法政大学市ヶ谷校舎58年館2階キャリア情報ルーム

座長：川島真

菰田将司（筑波大学大学院人文社会科学研究科）

「日清戦争後の李鴻章から見た清朝外交体制」

森川裕貫（東京大学大学院人文社会系研究科）

「中華民国初期の国家制度構想」

高橋一聡（一橋大学大学院言語社会研究科）

「1950年代国民党文化統合政策の変容—中国文芸協会に関する一考察—」

座長：坂元ひろ子

小野泰教（東京大学大学院 人文社会系研究科）

「洋務官僚の秩序観と西洋認識—郭嵩燾とその周辺—」

小林 亮介（筑波大学大学院人 文社会科学研究科）

「清末民初の東チベットにおける中蔵境界問題の形成」

大出尚子（筑波大学大学院人文社会科学研究科）

「『満洲国』の『民族協和』の理念と実相—満洲開拓政策を中心に—」

座長：趙宏偉

山影統（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科）

「1972年から1978年にみる中国の対米政策の変化—台湾問題と貿易問題のプ

ライオリ ティの考察—」

員要鋒（帝京大学大学院経済学研究科）

「中国の金融体制改革」

（これから開かれる研究会）

*最新の情報は、学会HP（<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jamcs/>）をご確認ください。

2006年度関西部会大会

日時：2006年6月4日午前10時～午後5時半（午前9時半受付開始）

会場：関西大学百周年記念会館

自由論題

□政治・法律分科会

午前司会 西村成雄（大阪外国語大学）

楊広平（一橋大学院生）「中国企業所得税法の統一における法的問題」

コメンテーター 宇田川幸則（名古屋大学）

ゲレル（一橋大学院生）「中国における少数民族の教育自治権について－中国

内モンゴル自治区におけるモンゴル族の学校教育を中心に－」

コメンテーター 鄭雅英（立命館大学）

横山政子（兵庫県立大学）「農村託児組織の運営と婦女労働力の組織化－大躍

進期を中心とした黒竜江省における事例」

コメンテーター 上田貴子（近畿大学）

午後司会 加々美光行（愛知大学）

金丸祐一（立命館大学）「戦争史研究における『和解への道』－最近の南京事件研究の言説」

コメンテーター 副島昭一（和歌山大学）

日野みどり（金城学院大学）「1970-80年代香港における労働運動と政治制度の

転換－『新青学社』の活動を中心に－」

コメンテーター 沢田ゆかり（東京外国語大学）

□経済・社会分科会

午前司会 上原一慶（京都大学）

李昱（愛知大学院生）「中国人留学生が学ぶべき日本」

コメンテーター 許衛東（大阪外国語大学）

窪田道夫（東京外国語大学院生）「中国赤十字の血液・臓器移植事業－医療の

市場化が加速する売血と臓器移植ビジネス－」

コメンテーター 川副延生（名古屋商科大学）

徐顕芬（早稲田大学）「日中関係と日本の対中ODA－第三次円借款の凍結及び再

開決定をめぐる」

コメンテーター 松野周治（立命館大学）

午後司会 佐々木信彰（大阪市立大学）

木下英雄（龍谷大学）「都市・農村間産業連関表を用いた全労働生産性変化の

要因分析」

コメンテーター 巖善平（桃山学院大学）

矢野剛（徳島大学）「中国企業間信用の機能とメカニズム－蘇南地域の実態調

査から－」

コメンテーター 山本裕美（京都大学）

□歴史分科会

午前司会 田中仁（大阪外国語大学）

戸澤由子（兵庫教育大学院生）「清代末期江浙地方の養蚕業」

コメンテーター 宮田道昭（神戸女学院大学）

大平浩史（立命館大学院生）「南京国民政府成立期の廟産興学問題と仏教界」

コメンテーター 川尻文彦（帝塚山学院大学）

広中一成（愛知大学院生）「冀東防共自治委員会の成立をめぐる日中関係」

コメンテーター 内田尚孝（淑徳大学）

午後司会 安井三吉（神戸大学名誉教授）

根岸智代（大阪外大院）「太平洋問題調査会（IPR）第六回ヨセミテ会議に

みる中

日問題の新段階」

コメンテーター 佐々木豊（相愛大学）

上野稔弘（東北大学東北アジア研究センター）「戦後期における新疆省将来構
想の動

向一分省論と高度自治論をめぐって」

コメンテーター 貴志俊彦（島根県立大学）

□文学分科会

午前司会 萩野脩二（関西大学）

津守陽（京都大学院生）「沈從文の女性形象に見る記号性と文学想像」

コメンテーター 今泉秀人（大阪外国語大学）

張新民（大阪市立大学）「グローバル化が進む中での中国映画」

コメンテーター 好並晶（関西大学）

瀬戸宏（摂南大学）「国立劇専第一回卒業公演『ベニスの商人』を巡って」

コメンテーター 西村正男（関西学院大学）

午後司会 宇野木洋（立命館大学）

豊田周子（大阪市立大学院生）「張我軍作品の再検討」

コメンテーター 澤井律之（光華女子大学）

子安加余子（福井大学）「近代中国における民俗学研究 一江紹原の取り組み」

コメンテーター 絹川浩敏（立命館大学）

共通論題

石田浩先生追悼シンポジウム「石田浩ーその人と研究」

日本台湾学会理事長、日本現代中国学会常任理事・関西部会事務局代表、アジ
ア政経学会理事であった石田浩先生は、本年1月8日在外研究先の台北で急逝
されました。石田先生の業績と遺徳を偲び、下記のように追悼シンポジウムを
おこなうことになりました。

司会 国分良成（慶応大学、アジア政経学会）

パネラー 大島一二（東京農大、アジア政経学会）、巖善平（桃山学院大、

日本現

代中国学会）、佐藤幸人（アジア経済研究所、日本台湾学会）

*本シンポジウムは関西部会大会共通論題の形態をとりますが、3学会共催で
す。この扱いについては、3学会の了承を得ています。

（組織状況） 5月10日現在連絡所受理分

総会員数694名（住所不明者含む）

<入会者7名>

氏名 所属 入会年月日

高橋 健太郎 駒澤大学文学部地理学科 2006/03/14

吉川 成美 東京農業大学大学院農学研究科 2006/03/07

広中 一成 愛知大学大学院中国研究科 2006/03/07

豊田 周子 大阪市立大学文学研究科 2006/02/27

横浜 勇樹 三重中京大学短期大学部 2006/02/01

中井 明 南開大学歴史学院博士課程 2006/01/23

李 廷江 中央大学法学部 2006/01/23

<退会者16名>

氏名 退会年月日

範 麗雅 2006/03/31

秋吉 收 2006/02/28

（以下、会費滞納による退会）

王 智新 2006/03/31
韓 応飛 2006/03/31
朱 鳳 2006/03/31
潘 世聖 2006/03/31
劉 曉梅 2006/03/31
田辺 鉄 2006/03/31
土田 真靖 2006/03/31
呉 仁正 2006/03/31
葉 剛 2006/03/31
土屋 仁志 2006/03/31
張 壁東 2006/03/31
株式会社徳間書店映像事業部 2006/03/31
嵯峨 隆 2006/03/31
椎木 緑司 2006/03/31



【編集後記】

書いたり書かなかったりの後記ですが、今回はひと言書いておきます。1月に台湾で急逝された石田浩先生の追悼文を、石田先生の旧友である川井先生からいただきました。また6月4日に開かれる関西部会大会（今回から春期・夏期研究集会を一本化）では、「追悼シンポジウム」が計画されています。こうした動きからも、石田先生が多くの研究仲間から慕われ信頼されていたことが推察されます。かくいう私にも、石田先生が往時復旦大学に研究滞在されていたとき、一介の留学生であった私と親しくつきあって頂いた懐かしい思い出があります。ただご冥福を祈るのみです。

（新谷）



日本現代中国学会事務局 E-mail:genchujp@yahoo.co.jp
153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 東大教養学部中国語研究室気付
郵便振替 東京00190-6-155984 日本現代中国学会
編集担当 新谷秀明（西日本部会・西南学院大学）